

### 自己評価及び外部評価結果

**【事業所概要(事業所記入)】**

事業所番号	0972100457		
法人名	社会福祉法人 幸知会		
事業所名	グループホーム ヘブリートータス		
所在地	栃木県河内郡上三川町下神主231-1		
自己評価作成日	平成28年10月31日	評価結果市町村受理日	平成29年3月15日

**【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】**

季節に合わせた行事や行事食などを年間で計画し、昔からの風習を感じて頂きながら催し物の準備や食事を利用者様と一緒に作る事で、生まれるやりがいや、職員との信頼関係を強め、思いを聞きながら思い出に残る時間になるよう取り組んでいる。施設内通貨(ペリー)を生活リハビリ[稼ぐ・貯める・使う]やレクリエーションに活用し個々のニーズの引出しやサービスの提供に繋げている。楽しみながらレクリエーションを行う為に、県内初のケアランボリンの導入や、くもん学習療法を通じて楽しみながら認知症の進行予防や利用者様の変化の気づきに繋がったり、コミュニケーションの中から個々の笑顔を引き出し、意欲向上や精神面でのフォローに繋げている。ブログの発信では、その日に行なったこと(行事や日常生活の様子など)をホームページに更新。いつでもどこでも家族様はもちろん、誰でもヘブリーの様子が見られるようにしている。

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="http://www.t-kjcenter.jp/kaigosip/Top.do">http://www.t-kjcenter.jp/kaigosip/Top.do</a>
----------	---

**【評価機関概要(評価機関記入)】**

評価機関名	社団法人 栃木県社会福祉士会		
所在地	宇都宮市若草1-10-6 とちぎ福祉プラザ3階 (とちぎソーシャルケアサービス共同事務所内)		
訪問調査日	平成28年11月25日		

**【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】**

①古民家風の建物は、リビングやオープンキッチンを中心に居室やトイレが配置され職員が仕事をしながら全体を見渡せる構造になっている。また、吹き抜けのため採光が入りやすく明るい造りである。築11年の建物であるが月2回の業者による清掃など、清潔や環境美化にも力を入れている。②利用者のADLを下げないよう、施設内通貨を利用した作業や公文式学習、ケアランボリンの導入などの取り組みがある。③月に1回季節の食材を利用した夕食作りを利用者と共に実施している。また、利用者の希望に合わせた選択食を導入したり、献立にこだわることなく食事を楽しむ工夫が行われている。④多彩なボランティアを受け入れている。またホームページでブログを開設し多くの職員が書き込むことにより、事業所の内容を地域に発信している。⑤法人では各種委員会を設置したり、トータスアカデミーというスキルアップのための体制を設け、職員の資質の向上に努めている。

**V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します**

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりの拡がりや深まりがあり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	「経営理念」「指針」を事務所に掲示し、全職員が毎日唱和すると共に、フィロソフィに基づき自分の考えを発言する場を設け、意識を高めて理解し、理念に基づいたケアを実践できるように、日々の業務に当たっている。	屋礼において、全員で「理念」「指針」を唱和し、毎日当番が京セラフィロソフィーの本から一つの言葉を選び、その日の行動目標として発表し、全員が一つの目標の下にケア実践が行われている。この取り組みは、現場での実践だけでなく「人としてどう生きるか」という生き方としての意識付けに	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	日常の散歩で地域の方との交流を深めると共に、地域の行事に参加したり、地域の方たちを招いている。又、積極的にボランティアを依頼したり、行事を通して隣接しているディサービスの利用者とも交流ができている。更にホームページのブログを利用して施設の様子をリアルに発信している。	マジックショーやコーラスのほか、楽々体操、本の読み聞かせなど多彩なボランティアを受け入れている。納涼祭では、花火や仮装などで利用者、家族、職員、地域の人たちが一緒になって交流を図っている。ホームページに職員のブログを載せることにより、一般の方も簡単に事業所の情報を	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	運営推進会議などで、ホームの様子を報告する事により、町職員や地域住民の民生委員、社会福祉事務所の方々の協力のもと認知症の方を理解して頂いている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2ヶ月に1度(6回/年)運営推進会議を行い、ご家族や入居者、町職員、民生委員、社会福祉事務所、包括支援センターの方々から意見を伺い、日々のケアに活かしている。	今年度から参加者を固定し、テーマも前もって決めているため、年間を通じて継続的な話し合いが持てるようになっている。参加者には生活困窮者の相談にものれる学識経験者のメンバーもいる。会議の中からボランティアの受入や、ケアトランポリンの話が出て事業所で導入している。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	運営推進会議での意見交換や相談だけでなく、行事への参加により、現場で利用者として頂き、より良い関係を築けるよう取り組んでいる。	町の保健課の職員が運営推進会議のメンバーとして必ず参加し、意見交換が行われている。日常的にも、制度上の問題など気軽に相談できる体制になっている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	法人に身体拘束事故防止委員会があり、毎月目標を掲げ、勉強会を開催し、全職員が本人の意思を尊重した自由な生活を送れるよう意識してケアに努めている。	法人の委員会で、事故やヒヤリハット事例を検討し、利用者の自立支援と安全に配慮して対応している。付き添いや見守り、言葉かけなどにより事故防止をして拘束しないケアの実践を行っている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法等について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	身体拘束事故防止委員会にて高齢者虐待防止関連法について、勉強会で学びながら、全職員に向けて虐待を行わない意識付けを発信している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	必要な研修会に積極的に参加しており、困難事例に対して、社会福祉事務所の方へ相談し支援の充実に繋げている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時に内容の読み合わせを行い、不安な点や疑問点の解消を図ると共に、入所後も疑問が出た時には説明する機会を設けている。また変更時には文面・口頭の両方で報告を行っている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営推進会議に入居者・家族に参加して頂き、意見や要望を伺っている。玄関に意見箱を設置し、自由に投書できるよう配慮するだけでなく、電子メールにて、意見交換や要望を伺う体制も整っており活用している。	年2回の家族会や、面会時の家族との話し合いが、家族の意見を聞く機会になっている。職員は家族と利用者の両方の意見を聞きながら両者の意見や要望の橋渡しに心がけている。	高齢化や家族関係が変化する中で、近くに親族が居なかったり、家族の意向が複雑化してきている。このような家族に対し、利用者や家族の意見をより反映し、調整していくような工夫や取り組みに期待したい。
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	部署別部門会議と法人全体の経営会議を月に1度行うだけでなく、年に2回、個人面談にて意見や提案を聞く機会を作っている。	職員は定期的な会議で司会を持ち回りにして、自分の考えをまとめたり、自分の考えを発表する等の良い機会になっている。管理者も日常業務を通じて一人ひとりの職員の意見を聞くように努めている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	年に2回、上司との面談で勤務状況だけでなく、個人の目標や自己評価などを把握した上で、上司の評価も合わせ、反映している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	採用時に新人教育を受けた後、主任やリーダーに付いて勉強していくが、その後は、適宜行われる委員会での勉強会や部署ごとに必要な勉強会に全職員が参加できる機会がある。レベルアップの指針としてトータスアカデミー制度がある。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	老施協のグループホーム部会から脱退して、今はどこにも入っていない。包括センターで行っている研修には参加しており、他施設との交流を通じ、刺激になっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	ホームで見学して頂き、雰囲気を感じて頂いた上で、不安を和らげ、困っている事を親身になって聞く事により、信頼関係を築けるように努める。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族の立場で話を伺う事で、少しでも不安を和らげ、困っている事や要望を知り、解決に向けて善処する事で、信頼関係を築けるように努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスの利用を開始する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人と家族から現状を伺い、要望に添う努力をしている。また、必要な支援が他のサービスと思われる場合には、本人に適したサービスの相談者を紹介している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	利用者と家族同様の接し方をすることで、ニーズを引き出し、喜びの倍増、悲しみの軽減に結びつくような支え合う関係を、築くように努めている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	入居してからも家族との関係は大切にして頂きたいので、行事への参加、面会だけでなく、受診においても家族に付き添って頂く事により、本人の健康状態を理解して頂き、一緒に時間を持って頂く。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	入居者との会話の中で挙げた人について電話の発信・受信や手紙の発信、遊びに来て頂いたり、関係の継続を支援している。又、地域の行事に参加することで、馴染みの人と継続的に関係が維持されている。	昔からの利用者の知り合いが、法人内の施設を利用している時に、交流の機会の場を提供している。中々会えない友達には、電話や手紙などの発信支援を行っている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者が同士の関わり合い、支え合えるような支援に努めている	お互いの部屋の行き来により、より一層の友好的な関係が築けている。共同生活の為、生活歴・性格等から人間関係がうまくいかずトラブルになる事もある為、声掛けや話し合いの場を設け様子を伺いトラブルが大きくなるような対応を努めている。		

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	契約終了の理由によるが、長期入院の方に対してはお見舞いに行ったり、隣接の特養へ移られた方には面会に行き、支援上の配慮など、情報を詳しく伝えている。			
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>						
23	(9)	○思いやりや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	本人にとって居心地の良い生活をして頂けるよう、ニーズを引き出している。困難な場合は家族と相談し、本人にとって最良と思われる生活を送れるように努めている。	職員は利用者との相性を考えながら担当制を用いている。利用者との話の中で、そのことが本当の本人の希望なのか、少し時間を空けて様子を見て確認している。他の職員から話を聞いたり、入浴など一対一になれる機会を意識的に作り思いや意向の把握に努めている。		
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	家族からの情報と本人とのコミュニケーションで得た情報をもとに、これまでの生活歴(職業・趣味・昔の暮らしぶり)等を把握し、サービスに役立てている。			
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	生活歴をもとに個々の能力や趣味を活かし、その人らしく暮らしていけるよう支援している。			
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人の希望ややりがいを第一に考え、家族の意見を聞き理解して頂いた上で、介護計画書を相談、作成している。また、状態の変化に伴い、見直しを行っている。	ケアマネージャーが中心になって、利用者や家族の思いや要望を引き出し、担当職員の意見も含めて介護計画を作成している。日常的に関係者と情報交換を行い、利用者の変化が有るときは見直しを行っている。		
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	その日の出来事や健康状態などを記録した個人記録を、勤務前に目を通して、情報の共有をしている。気になった点はミーティング等でその日の内に話し合い、対応方法を検討して介護計画の見直しに活かしている。			
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	特養やデイサービスが隣接しているため、協力連携体制は取れており、希望時には行き来している。			

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	ホームで地域交流として図書館のボランティアや社協の紹介でのボランティア、また職員の友人のボランティアなど多種多様に依頼し来て頂いている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	本人・家族が希望している病院で受診して頂き、主治医にホームでの情報を提供したり、受診時の状況をご家族にお聞きするなどの連携を図っている。	本人が希望するかかりつけ医を受診している。受診は、家族の付き添いが原則だが、家族の高齢化や仕事の都合などで職員が付き添うことも多くなってきた。事業所は、受診時にバイタル等の情報提供をしたり、受診結果を家族に聞くなどの連携を図っている。	
31		○看護職員との協働 介護職員は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職員や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	全利用者様の医療面の情報を伝え、状態の気になる方は朝・夕に看護職へ報告・相談し、指示を仰いでいる。又、夜間時の特変時は拘束者に電話をし指示を仰いでいる。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。また、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	本人の状態については病院側・家族側の両方から確認を行い、退院に向けて病院と相談を心がけている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域との関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	利用者が元気なうちに本人の希望、または家族の希望に添えるよう、職員間で意思の統一を図り、随時、意思を確認し、ハード面での限界がある事を伝えたと、本人が望む生活ができるよう支援している。又、他の利用者の精神面においても、考慮しながら取り組んでいる。	現在は設備や体制の問題があり、看取りは行っていない。事業所で出来ないことを情報提供して、本人と家族との話し合いでケアを行っている。緊急対応マニュアルがあり、委員会では定期的に研修を行っている。	利用者の高齢化によるADLの低下や認知度が重度化する中、家族の意向を聞きながら利用者が少しでも長く安全安心な生活が送れるよう、職員は何が出来るのか、先を見据えた具体的なケアを実践できるように、職員間で研修を通しより一層の意識の共有化を期待したい。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急時対応マニュアル(利用者のADLファイルも含め)、を作成し、急変時、全職員が速やかに対応できるよう看護職の協力のもと、訓練を行っている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年に2回以上、防災委員会の協力のもと、あらゆる場合を想定し、避難訓練、消化訓練、通報訓練などを行っている。消防署への協力も依頼している。	年に2回火災や地震に備えた避難訓練を実施している。法人で防災委員会を設置しており、防災委員は法人の他の施設の訓練にも参加し、避難技術の研鑽や情報交換に努めている。缶詰を中心に2日分の食料備蓄もされている。	

自己	外部	項目	外部評価	
			自己評価 実践状況	実践状況 次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>				
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	入居者の気持ちを尊重しながら、言葉遣いや対応などに不快感を与えないようにし、温かい言葉掛けに努めている。居室訪室や排泄、入浴介助にはプライバシーの配慮を十分気をつけている。	職員はトータスカデミーという、プライバシー保護を含めた、スキルアップ体制があり、そこで学ぶ機会を得ている。また、排泄や入浴介助では同性介助を心掛けている。
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	公文学習療法の中のコミュニケーションで、思いを聞きやすい環境を作り、施設内通貨を利用することで、自身の希望を叶え易い環境を作るなど注意している。	
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	趣味・特技を活かして頂けるよう、1人ひとりの時間を大切にしている。散歩やレクリエーション(集団レク・個別レク)の充実などで、好きな事を楽しく行って頂ける日常生活を支援している。	
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	本人の好みを尊重し、その人らしさ、こだわりを大切にしている。難しい方にはさりげなく、整えられるよう支援している。	
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	入居者のできる事に応じて、それぞれが役割を持ち行っている。旬のものを取り入れた食事や季節に合わせた行事食メニュー、選択メニュー、夕食作りなどで希望を取り入れ利用者と一緒に考え、食事作りなどを行っている。	現在は法人の厨房で昼食、夕食を作って提供しているが、毎月1回、季節感のある食材で、夕食作りを実施して料理を提供している。利用者の希望を取り入れた選択メニューや外食も定期的に実施している。利用者は、調理準備や片付けにも参加し、施設内通貨を得る機会になっており、楽し
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	おやつ・食事は常に水分・食事摂取量に目を配り、変化のある時は記録に残し、状況に応じた対応をとっている。随時、栄養士に相談し、メニュー・調理・配膳と総合的なアドバイスももらっている。	
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	食後の歯磨きの声掛け、介助を行い、就寝前には義歯を預かり管理している。拒否のある方については、うがいでの対応をしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立に向けた支援を行っている	個々の排泄パターンを把握した上で、トイレの声掛け、誘導を行っている。スムーズなトイレ誘導が行えるよう、入居者のサインを見逃さずに尊厳ある声掛けに努めている。	職員は一人ひとりの排泄パターンを把握し、チェック表を使わずにトイレ誘導を行っている。半数ぐらいの利用者は、介護パンツを利用なく自立で排泄できる。夜間は必要に応じて居室に簡易トイレを用意している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	適度な運動、10時のおやつ時の牛乳の提供や水分の声掛けを行いつつ、栄養士の助言のもと、便秘予防の食材や調理法などを取り入れている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々に応じた入浴の支援をしている	1日置きに入浴できる体制をとっている。順番と一緒に入りたい人などを考慮し、トラブルなくゆっくりと入れるようにしており、希望者には足浴や清拭を行っている。又、入浴拒否の方には、時間をかけ不安を取り除く声掛けを行い支援している。	浴室は重度化を見通し、機械浴槽を設置できるスペースを確保している。ふらつきによる転倒に注意しながら、個々に合った入浴方法や入浴時間を支援している。職員と一対一になることもあり、利用者の本音の声を聞ける機会にもなっている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	本人の生活リズムで昼寝や就寝時間を決めて頂いている。夜間の不眠時には、声を掛け話を聞いたり、飲み物を進めるなど、その方にあつた対応をし、安心して入眠できるよう支援している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	個人の薬の説明書を個人記録のファイルに綴り、全職員が把握している。内服や状態の変化などの確認も行い、変化時は記録に残している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	個々の得意なこと、好きなことを行って頂き、生き生きと生活して頂けるよう支援している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	ホーム内の行事での外出だけでなく、日頃から個々の希望を把握し、ADLに配慮した上で、友達同士や個人での外出を家族の協力のもと支援している。	重度化によりユニット全体での外出は減っているが、買い物や外出など、個々の希望を把握した上で、家族の協力を得ながら支援している。職員が「やってあげた」感が出ないような本人本意の外出支援に心がけている。	



自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	基本的には施設で預かっているが、家族が了承している人は本人が管理している小遣いもあり、買い物や外食など状況に応じて自己にて支払っている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	携帯電話を持っている方に関しては自由に家族や友人と連絡を取り合っている。持って無い方の要望には施設の電話を使用して頂いており、取り次ぎもしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	季節に合わせた掲示物や入居者や職員が手作りした飾りでホールや居室入口、トイレを彩り、心地良い空間を楽しんで頂いている。キッチンに入居者が調理や片づけをしやすいようオープンキッチンになっており、天井が高く明かり窓があり、採光や通風にも配慮している。	古民家風の建物は、落ち着いた癒やしの空間を作り出している。広いリビングを中心にオープンキッチンがあり、周りに居室やトイレ、浴室が配置されている。天井は、吹き抜けで採光も十分取れる作りになっている。月に2回、業者の清掃が入り、床や窓ガラスはとても綺麗に清掃が行き届いている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ユニット毎に1つずつ掘りごたつがあり、テレビを見たり、畳で横になったりと寛いで頂いている。また、ソファーでは新聞を読んだりゲーム、談話など自由に過ごして頂いている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	仏壇やたんす、テーブルなど自由に慣れ親しんだ物を持参して頂き、写真や趣味の手作り品などで室内を好きなようにレイアウトして頂く事で、居心地よく過ごせるようにしている。入り口ドアは、目線にあった場所に名札や写真を貼り、居室を間違えないような配慮をしている。	本人のベッドやタンスなど自由に持ち込みが可能である。本人の希望を聞きながらベッドや家具の配置を決め、居心地良い空間作りに努めている。壁には思い思いの作品や写真などを飾っている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	自分のペースを大切に、安全に焦らず行えるよう支援し、分かる力・考える力を活かしてできるだけ自立した生活が送れるようにしている。		